

女子大学生の発達課題への対処意識と  
自我同一性感覚との関連について

辻 井 正 次

**THE RELATIONSHIP BETWEEN THE AWARENESS OF  
COPING WITH DEVELOPMENTAL TASKS  
AND THE SENSE OF EGO-IDENTITY  
IN COLLEGE FEMALE STUDENTS.**

**Masatsugu TSUJII**

This study aimed to investigate the relationship between the awareness of coping with developmental tasks and ego-identity on college women. In study 1, *the Developmental Tasks Scales for Adolescents (DTS)* were administered to 8 school counsellors (7 clinical psychologists and a psychiatrist), and, as a result, DTS items were classified into three categories—adaptation on college life, graduation from college, and general tasks. In study 2, DTS and Ego-identity Scale (EIS) were administered to 119 college women (60 freshmen and 59 juniors). Four factors were extracted by factor analysis on DTS, these factors being future-orientation, acceptance of the femininity, independence from parents, and college life. The results of this study showed that juniors felt significantly more important than freshmen, especially on future-orientation and independence from parents. Differences in the relationship between DTS and EIS were seen in correlations. For juniors, DTS correlated stronger with ego-identity. The results of both studies indicate that, freshmen seem to show signs of early adolescence on coping with developmental tasks, while junior students are aware that they cope with tasks of later adolescence with relation to ego-identity.

Received September 30, 1993

## 問 題

青年期に何を成し遂げるべきかという点について、今まで様々なことが言われてきた。Erikson (1959) は精神分析的自我心理学の立場から人間のパーソナリティの生涯にわたる発達を個体発達分化図式として描き、そのなかの青年期における発達課題として「自我同一性 (ego-identity) 対 同一性拡散」をあげている。自我同一性とは、青年期以前の全ての同一化群の捉え直しをした上で、それらの同一化群を、自我が新たに社会との関連のなかで統合したものとして成立する。そして時間的な自己の一貫性と、他者からみた自己と自分の捉えている自己との一致からあらわれる自分自身の統合的な「自分が自分であること」の感覚としてあらわれる。こうした自我同一性感覚の獲得を青年期の最も重要な発達課題とする Erikson の考えは、現在、広く受け入れられてきた。しかし、Erikson の自我同一性概念は抽象的で難解であるため、実際の青年を対象とした実証的な研究をすすめていく上では、より具体的な発達課題への取り組みのなかで自我同一性感覚のあらわれを見つめていく必要性がある。

人間の生涯発達の各々の発達段階で成し遂げなくてはならない課題を発達課題として概念化したのは、Havighurst, R. J. (1953) である。彼によれば「発達課題とは人の生涯のそれぞれの時期に生ずる課題で、それを達成すれば、その人は幸福になり、次の発達段階の課題の達成も容易になるが、失敗した場合は、その人は不幸になり、社会から承認されず、次の発達段階の課題を成し遂げるのも困難となる課題」で、青年期については9項目の発達課題をあげている。近年においても、Newman, B. M., & Newman, P. R. (1984) は Erikson の発達課題を基にしながら、青年期前期の課題として身体的成熟、形式的操作、情動の発達、仲間集団における成員性、異性関係を、また、青年期後期の課題として両親からの自立、性役割同一性、道徳の内化、職業選択をあげている。また、同一性研究の中でも、Marcia, J. (1966) 以降の同一性ステータス研究の中で、同一性を達成していく上での重要な領域 (発達課題となる領域) として、Marcia は職業、政治、宗教をあげていたが、近年、価値観 (無藤, 1979) や性役割や婚前交渉 (Schenkel & Marcis, 1972; Waterman & Nevid, 1977; Hodgson & Fischer, 1979) 等へと領域が拡張されてきている。

青年期の発達課題に取り組むことは、青年にとってストレスの高いことであることが予想される。三川 (1988) はそうした青年期の発達課題への取り組み (対処; Coping) を別な視点で生活ストレスと対処行動 (Coping Behavior) との関連から検討し、青年期生活ストレス尺度を作成して、因子分析の結果から、病気や別離、学業上の問題、対人関係での問題、転居・転校、卒業・進学の5つの因子を見いだしている。こうした、生活ストレスや、あるいはストレスの高い生活上の事件としての Life-Events Scale (例えば、Yeaworth, T. C., York, J., Hussey, M. A. et al, 1980) と対処行動との関連も重要な視点ではあるが、青年期

から成人期へと至る発達過程を描いていくためには発達課題という形での概念化をすすめることが不可欠である。さらに、青年（大学生）が実際の大学生活で発達課題への対処に困難を感じた際に利用することが多いと考えられる、学生相談活動のなかで、鶴田（1989）は、大学生の個別相談事例の特徴をあげ、その相談内容として大きく、進路・修学、学生生活、心理障害、精神衛生の5つに分類し、それぞれについて面接過程も含めた詳細な検討をしている。なかでも、進路・修学についての相談が全相談人数の34.8%、学生生活をめぐる相談が20.2%、対人関係をめぐる相談が14.6%と大きな役割を占めており、それらの進路や学生生活、対人関係が大学生にとって重要であり、また、その対処に困難を感じる課題であることを示していると考えられる。また、小川（1989）は女子学生にとって3年次が第2の関門であることを学生相談事例からあげ、男子学生と比べて、女子学生ではやや異なったつまづきの原因（学業上の問題）があることを示した。自我同一性感覚と発達課題への対処との関連における性差が辻井（1989a）は半構造化面接から事例的に検討している。その結果、男子に比べて、第1に女子では物事に関与できず、依存的であることが親の枠組みとして保証されて、葛藤的ではないこと、第2に高い自我同一性感覚をもつことが女子の場合には伝統的な性役割と矛盾する要素があり、女性性受容に葛藤を感じることで、第3に将来展望として女子には自我同一性感覚の高低に対応する2つの在り方——男性と同じように自立するか、親の言う通り家庭に入るか——があることを明らかにした。また、自我同一性研究のなかで、高橋（1988）、Josselson（1973）は同一性ステータスと親密性ステータスとの関連から性差について論じ、女子では同一性ステータスの高低に関わらずに親密性の進展が進むことを明らかにしている。さらに、Hodgson & Fisher（1979）、山本（1988）などでは女性の同一性形成の独自性を示している。Erikson（1968）自身、女性の同一性形成にははじめから対人関係の側面が関わっていると述べており、女性の自我同一性形成の独自性を認めている。しかしながら、発達課題全般を対象として、女子青年（大学生）がどのような発達課題を重要と感じており、またどのような課題に対してより積極的な対処をしているのかはいまだ十分明らかにされていない。また、大学生活の中でも、先の小川の研究等を参考にすれば下級生と上級生とではより重要と感じる発達課題も異なると考えられる。

以上のような従来の研究成果をふまえて、本研究では、女子大学生を対象として、青年期の発達課題について今まで言われてきた様々な課題を整理して、発達課題への取り組みへの意識（自覚）の程度を「発達課題への対処意識」として概念化し、発達課題について、どのくらい自分にとって重要と思うかを評価させる青年期発達課題尺度（DTS）を作成する。そして、そこで作成されたDTSに対して、発達課題への対処につまづいた大学生に対して心理的援助を行う心理臨床専門職を対象に、発達課題の学生による変動の有無について検討し、学年によっての何らかの特性があるかどうか等、発達課題の内容についての検討を行うことを第1の目的とする。さらに、学年による発達課題への対処意識の程度の変化について、自

我同一性感覚との関連から検討し、そのことから女子大学生の大学生活における発達課題の有り様を把握し、発達課題への取り組みの意識と自我同一性感覚との関連を明らかにすることを第2の目的とする。

## 調 査 I

1) 目的：青年期発達課題尺度 (DTS; Developmental Tasks Scale for Adolescents) を作成し、大学生の学生生活相談を行っている心理臨床専門職を対象として学年による項目の重要度についての評定を依頼し、そこでの学年での重要度の変動の有無について検討を行い、発達課題の内容についての内容面での検討を加える。

2) 青年期発達課題尺度の作成：青年期発達課題尺度 (DTS) 作成のために Havighurst, R. J. (1953), Newman & Newman (1984) 等で従来あげられてきた青年期の発達課題を整理するとともに、Erikson のあげている自我同一性の構成概念、三川 (1988) の生活ストレス尺度や Yeaworth ら (1980) の Life Event Scale, さらに鶴田 (1989) 等の学生相談の相談内容等を参考にして、大学生が心理的危機を体験する可能性のある発達課題として30項目の仮尺度を作成し、教育心理学専攻の大学院生1名に内容的妥当性の検討を依頼したところ、項目表現も含めて30項目全てが妥当なものと認められた。

3) 調査の実施：学生相談をしている心理臨床家 (臨床心理士7名及び精神科医1名) 8名を対象とした。対象は男性3人、女性5人。平均年齢は40.0才 (32才～57才)。平均臨床経験は13.4年 (6年～30年) であった。調査は筆者が行い、大学1年から4年までの大学生を想定して、各学年ごとに (例えば学生相談の来談の契機となりうるような) どのような発達上の課題に遭遇するか、また、遭遇する課題のなかで、どのような課題が重要なのかという、心理的問題の質について4段階でどのくらい重要かを検討してもらった。教示の言葉は、「各項目ごとに、1年生から4年生までの学生にとって重要と思われる程度を『重要である (4点)』から『重要でない (1点)』までの4段階で評定してください」というもので、1989年7月に学生相談の研究会で研究趣旨の説明、及び教示と尺度の配布を行い、郵送で回収を行った。

4) 結果と考察：調査の結果を図1に示す。学年についての一要因分散分析を行ったところ、14項目に学年差 (5%水準) が見られた。全体として学年が上がるにつれて得点の上昇が見られた項目群と、得点の低下が見られた項目群とがあった。残りの16項目については学年差が見られなかった。得点上昇が見られたのは、「専門的な学問」、「職業選択」、「将来的な生き方のプラン」、「精神的自立」、「職業と結婚の両立」、「家族内での役割や位置」、「社会的な役割での女性としての生き方」、「価値観・世界観」、「社会に出る覚悟」、「異性との親密な関係」、「将来的な方向性」の11項目で、学年が上がるほど、課題の重要度が高まると心理的援助の専門家は考えていることが明らかになった。また、「大学への満足」、「新しい人間関係」、

女子大学生の発達課題への対処意識と自我同一性感覚との関連について

表一 心理臨床専門職の青年期発達課題の重要度評定 (平均値)

	1年	2年	3年	4年
DT 1	3.86	2.57	3.29	2.57
2	4.00	2.71	3.00	2.57
3	2.29	2.71	3.57	4.00
4	3.00	3.00	3.29	3.43
5	2.43	2.86	3.00	3.00
6	2.71	2.71	2.43	2.57
7	3.29	3.71	3.00	3.00
8	2.43	2.71	3.43	4.00
9	2.86	2.71	2.86	3.29
10	3.14	3.43	2.57	2.00
11	3.57	3.43	3.43	3.71
12	4.00	3.71	3.43	3.14
13	3.00	3.43	3.43	3.29
14	2.86	2.71	3.43	4.00
15	2.43	2.71	3.14	3.29
16	3.14	3.14	3.86	3.86
17	3.29	3.57	3.57	3.57
18	3.29	3.14	3.43	3.71
19	1.86	2.29	3.00	3.43
20	3.71	3.86	3.57	3.86
21	2.29	2.71	3.29	3.29
22	2.29	2.71	3.57	3.57
23	2.86	3.00	3.86	3.86
24	2.86	3.57	2.71	2.57
25	1.57	2.00	2.86	3.86
26	2.14	3.00	3.14	3.43
27	3.29	3.29	3.29	3.43
28	3.29	3.29	3.43	3.57
29	2.57	2.71	3.57	3.86
30	3.00	3.14	3.57	3.71
DTS 全体	87.29	90.57	97.00	101.43

(項目表現については表一 2 参照のこと)

「学業以外の活動」の3項目については、学年の低い1, 2年生にとって重要な課題だと考えられていることが明らかになった。全体の約半分にあたる14項目に学年による重要度の変動が見られた。しかし、そこで見られた変動は4年間の大学生活のなかでその学年の位置付けを明確にするものであると考えられる。専門家からみた視点は、大学に入学し、適応していくという意味での発達課題(学年上昇につれて得点の低下の見られた項目内容)と、大学

を卒業し、社会へ出て職業的にも家庭的にも自分の居場所を見つけ、自立していくという意味での発達課題(学年上昇に連れて得点の上昇が見られた項目内容)、さらに、大学生活を通して大きく変動のない、より一般的な発達課題との3つの次元での課題があることが示されたとも言える。より一般的な発達課題には、身体的性的受容や同性・異性との交友、余暇での活動を自分で行うこと等が含まれていた。

第1の、入学し適応していくという課題について、単に適応という側面ではなく、鶴田(1991)は入学期の学生の個別相談事例の検討から、この時期の課題として、今までの生活から離れ新しい生活へと入ること、今までの友人との別れや親からの分離、自分自身の興味を見つけ新しい環境で能力を試すこと等をあげている。また、同様に Margolis (1981)はこの時期の課題として他者と比較した自分の差異をいかに受け入れるかが重要だとして、古い能力を再整理して新しい能力へと変えることが必要だとしている。また第2の、大学を卒業し社会での居場所を見つけ自立していく課題については、主として同一性形成とかかわる職業や価値観の形成を行い、将来展望をもって生き方のプランを見つけていく、Newmanらの青年期後期の課題を成し遂げていくことを大学生活の成果として期待していることがうかがえる。さらに、第3の、大学の4年間で変化がない課題としては、身体的性的受容や友人関係、自律性といった、Newmanらの青年期前期の課題があげられ、こうした課題は大学生活で明確に達成が期待されるようなものではなく、より基礎的な課題として捉えられているように思われる。

## 調 査 II

### 1) 目的：

実際に女子大生を対象に調査を実施し、学年による発達課題への対処意識の程度の変化について、自我同一性感覚との関連から検討し、女子大学生の大学生活における発達課題の有り様を把握し、発達課題への取り組みの意識と自我同一性感覚との関連を明らかにする。

### 2) 方法：

① 被験者：X女子大学文学部の心理学・教育学・社会学専攻学生119人（1年生60人，3年生59人）。年齢は18才から22才。

② 質問紙：

a). 青年期発達課題尺度 (DTS)：

先の調査Iで作成した青年期発達課題尺度 (DTS; Developmental Tasks Scale for adolescents)。大学生の発達課題への対処意識(取り組みへの自覚)を測定するための全30項目からなる。回答形式は、大学生を対象にして、30項目の各々の項目が、自分にとって、どの程度、重要と考えるかを6件法で、「重要である」を6点、「重要ではない」を1点として、

重要だと評定するほど高い得点が与えられるように記入するようになっている。

b). 自我同一性尺度 (EIS) :

自我同一性感覚については、辻井 (1989 b) の自我同一性感覚尺度 (EIS; Ego-Identity Scale) を用いた。EIS は Dignan, M. h. (1965) の概念化をもとに、自我同一性の主観的な表れである自我同一性感覚に焦点をあてて作成されたもので、4つの下位尺度(「自己の一貫性 (SC)」19項目、「目標指向性 (GD)」16項目、「自己肯定感 (SP)」12項目、「独自性 (UN)」11項目)、全58項目から構成されている。「自己の一貫性 (SC)」は他者から見た自己と自分自身の思う自己の一貫性と、情緒的にも、また、どんな状況下でも一貫した自分であるという安定し、統合された感覚である。また「目標指向性 (GD)」は自分の将来への方向性がわかり、そうした目標・方向へ意欲的に向かっていくことで職業志向や生き方へと結びついた感覚である。さらに「自己肯定感 (SP)」は自己に対する信頼感や満足感、自己受容、あるいは良好な対人関係をもっている (他者に受容されている) という自分に対する肯定的な感覚である。最後に「独自性 (UN)」は他者の前にあっても他者の意図に惑わされず、自分の意志 (主体性) をもっているという感覚である。各々の項目について、各個人に自分自身にどのくらいあてはまるかを、「あてはまる」を5点、「あてはまらない」を1点として、あてはまるほど高得点になるように5件法で記入するようになっている。

③ 調査の実施 :

1年生、3年生ともに、1990年1月に心理学の講義時間中に、集団実施を行なった。両方ともに筆者が教示を行なった。実施時間は20分~30分であった。

3) 結果と考察 :

① 青年期発達課題尺度の因子分析 :

青年期発達課題尺度 (DTS)、全30項目について、因子分析 (主因子法・バリマックス回転) を実施した。その結果、固有値の減少度と解釈可能性から、4因子を抽出した。因子負荷行列を表一1に示す。第1因子は、将来の自分の生活のプランをたてたり、職業を選択すること、自分なりの生き方や価値観を形成すること、またはアルバイト等の役割実験等の将来展望に関する8項目からなり、「将来展望」因子と命名した。第2因子は、自分の容姿に満足したり、異性の友人とつきあったりするような、女性としての自分、即ち、自分の女性性の受容についての7項目からなり、「女性性受容」因子と命名した。第3因子は、親からの経済的・精神的自立や家族のなかでの位置を見つける等の5項目からなり、「親からの自立」因子と命名した。第4因子は同性の友人との付き合いを良好に行ったり、学業に取り組んだり、学業以外の時間の有効活用などの、人との交友を中心とした学園生活に関する6項目からなり、「学園生活」因子と命名した。以上の4因子の各合計得点を DTS の4つの下位尺度として、「将来展望」下位尺度、「女性性受容」下位尺度、「親からの自立」下位尺度、「学園生活」下

位尺度を構成した。4つの下位尺度間には相互に.27～.55の相関があるものの、各下位尺度は $\alpha$ 係数で.71～.85の高い信頼性を示し、内的整合性の高い独立の尺度とみなされた。ここでの4つの因子をもとに、女子大学生の発達課題への取り組みの意識を操作的に概念化すると、発達課題への取り組みへの自覚は、職業選択を中核とする将来展望を作ること、異性との付き合いを含めた自分の女性性の受容をしていくこと、親からの自立をしていくこと、それに対人関係領域での取り組みを中心とする学園生活での適応をはかることとの4つの次元から定義できる。

## ② 青年期発達課題尺度と自我同一性感覚尺度の学年差：

青年期発達課題尺度 (DTS) と自我同一性感覚尺度 (EIS) の学年別の平均点・標準偏差・信頼性係数 ( $\alpha$ 係数) を表—2に示す。DTSの学年差についての下位尺度ごとにt検定を行った。その結果DTSについては、DTS全体 ( $p < .05$ ) と「将来展望」下位尺度 ( $p < .05$ ) 及び「親からの自立」下位尺度 ( $p < .01$ ) に有意差がみられた。1年生よりも3年生の方が青年期の発達課題 (特に、親からの自立と将来展望) について、より自分にとって重要なものだという認識を持つようになっている。また、DTSの各項目ごとの学年差 (t検定) を行ったところ、「将来的な生き方のプラン」 ( $p < .05$ )、「経済的自立」 ( $p < .10$ )、「精神的自立」 ( $p < .01$ )、「職業と結婚の両立」 ( $p < .10$ )、「家族内での役割や位置」 ( $p < .01$ )、「社会的な役割での女性としての生き方」 ( $p < .05$ )、「社会に出る覚悟」 ( $p < .05$ ) の7項目で3年生の方が1年よりも有意に高い得点、もしくは高得点傾向を示した。特に精神的自立や家族内での役割・位置の模索が3年生では強く自覚されている。調査の実施時期が1月ということもあり、1年生に比べ、3年生では目前に最終学年である4年生への進級も控え、徐々に親から経済的にも精神的にも自立していくことや、学業に取り組んだり、就職していくなどの将来的なプランがより現実的なものとなってきたことで発達課題に対する取り組みへの意識が変容してきたことを示すと考えられる。また、高橋 (1989) は小学6年生から大学4年生までの男女を対象に、青年期における親からの分離固体化過程 (第二の分離固体化: Blos, P., 1967) を検討しているが、そのなかで大学1年生と大学3年生でさらに分離固体化がすすみ、友人関係の確立や分離固体化の達成、親との共生欲求の低下が起こることを示している。こうした点を考慮すると、「親からの自立」下位尺度に有意な学年差が見られたことは、課題の重要性を意識することが、青年期に親から分離固体化していくことと密接な関わりがあることを示したと言える。

また、自我同一性感覚 (EIS) については4つの下位尺度、EIS全体ともに有意差が見られなかった。従来の研究 (Dignan; 1965, Stark, P.A., & Traxler, A. J.; 1974など) では、用いた尺度が異なるものの、学年が高いほど自我同一性得点は高くなっているが、本研究の結果はそれらとは異なっている。この点については、松田・広瀬 (1982) が指摘しているように自我同一性混乱については高校生を頂点にそれ以降は大きな変化を示さないのか、あるいは



女子大学生の発達課題への対処意識と自我同一性感覚との関連について

表一 2 青年期発達課題尺度 (DTS) の因子負荷行列

	I	II	III	IV	h2
29. 自分の将来的な方向を知ること	.74	.14	.25	.12	.65
27. 一貫した安定した自己評価を保つこと	.62	.28	.12	.04	.47
28. 自分に対して十分な信頼感を持つこと	.59	.23	.12	.06	.42
14. 将来的な生き方のプラン (人生設計) を持っていること	.58	.23	.30	.26	.54
8. 将来, どういった職業につくか考え, 決めること	.53	.11	.18	.34	.45
25. 卒業して社会に出ていく覚悟をきめること	.51	.14	.34	.12	.40
24. アルバイトなどの学外での生活活動にとりくみ, うまくやること	.42	.22	.23	.14	.30
30. 他人の前でも自分の意志を十分に主張すること	.41	.11	.10	.19	.23
23. 自分なりの価値観や世界観を持つこと	.37	-.01	.07	.29	.22
19. 将来的な, 職業と結婚の両立を考えること	.34	.16	.34	.32	.36
6. 自分の容姿に満足すること	.19	.78	.18	.10	.68
26. 異性 (男性) との親密な関係を持つこと	.27	.70	.15	.08	.60
5. 自分の身体を女性として, ある程度満足すること	.16	.68	.15	.17	.57
13. 異性 (男性) の友人とうまくつきあっていくこと	.35	.65	.00	.17	.57
9. 適度に性的な関心を持つこと	.02	.61	.24	.22	.48
4. 身体的・精神的健康を維持すること	.09	.45	.04	.36	.35
7. 余暇や自由な時間を自分なりに活用すること	.37	.41	.12	.16	.35
16. 母親への精神的依存から自立すること	.23	.15	.80	.03	.72
18. 親との間での適当な心理的距離をとること	.12	.19	.74	-.00	.59
17. 自分の関わる日常生活の, ほとんどのことを自分ですること	.25	.21	.58	.13	.46
15. 親への経済的依存から自立していくこと	.31	.10	.55	-.13	.43
21. 家族のなかでの自分の役割や位置を知っていること	.14	.12	.45	.39	.39
20. 同性の (女性の) 友人とうまくやっていくこと	.14	.23	.04	.60	.44
2. 大学での新しい人間関係に入っていくこと	.28	.16	.17	.53	.41
3. 専門的な学問にとりくむこと	.35	-.18	.16	.51	.44
10. クラブ・サークル活動などの学業以外の活動にとりくむこと	-.20	.29	.24	.50	.39
12. 話をしたり, 一緒に行動する同性 (女性) の友人を持つこと	.19	.23	-.01	.49	.32
1. 入学した大学・学部 (学科) に対して満足すること	.03	.09	-.12	.39	.18
11. やろうと思うことを自分の意志で実行すること	.36	.12	-.06	.38	.29
22. 社会的な女性としての役割を認めて, 女性としての生き方を模索すること	.37	.05	.30	.38	.37
2 乗和	3.29	3.43	2.96	2.76	

表—3 青年期発達課題尺度 (DTS) と自我同一性感覚尺度の学年別の平均値・標準偏差

	1年	3年	差	全体	$\alpha$ 係数
将来展望	37.92 (5.96)	40.10 (5.02)	*	39.05 (5.43)	.83
女性性受容	31.22 (6.12)	31.73 (5.02)		31.39 (5.54)	.85
親からの自立	22.07 (4.57)	24.32 (4.36)	**	23.05 (4.51)	.81
学園生活	28.93 (3.32)	29.03 (4.48)		29.01 (3.92)	.71
DTS 全体	138.77(17.59)	145.07(16.72)	*	141.80(16.96)	.91
SC 尺度	56.80(12.08)	57.51(14.21)		57.08(12.89)	.89
GD 尺度	50.58(10.83)	50.75(12.74)		51.04(12.23)	.89
SP 尺度	40.07 (6.87)	41.78 (8.54)		41.16 (7.85)	.81
UN 尺度	36.45 (6.74)	36.97 (6.61)		36.89 (6.76)	.76
EIS 全体	183.90(27.96)	187.00(32.59)		186.17(30.89)	.92

\* :  $P < .05$       \*\* :  $P < .01$ 

は尺度によるのか、今後さらに検討を加える必要がある。

③ 青年期発達課題尺度と自我同一性感覚尺度の関連について：

次に、青年期発達課題尺度 (DTS) と自我同一性感覚尺度 (EIS) の関連について、Pearson の積率相関係数をとった。その結果、DTS 全体と EIS 全体の間には有意な相関は得られなかったが、その下位尺度間では有意な相関が見られた。DTS に学年差があり、また1年生と3年生とで結果が異なっていたので、学年別の相関係数を表—4に示す。

1年生、3年生ともに、DTS 全体及び DTS の「学園生活」下位尺度と EIS の「自己肯定感 (SP)」尺度との相関が正の有意傾向 ( $< .10$ ) であり、自己肯定感の高い者が発達課題を重要だと感じている。1年生では EIS の「目標指向性 (GD)」尺度と DTS の「学園生活」下位尺度の相関が正の有意傾向にあり、将来的なプランを持って努力する傾向の高い人ほど、現在の学業や友人関係を自分にとって重要なことだと位置づけている。また、EIS の SP 尺度と DTS の「女性性受容」下位尺度との相関が正の有意傾向 ( $< .10$ ) で、女性としての自分が受容できているほど、自己肯定感が高くなっている。一方、DTS の下位尺度間相関において「学園生活」と「親からの自立」が無相関だった。

他方、3年生では、全体的には1年生に比べて、発達課題への取り組みへの意識と自我同一性感覚とが有意な関連を多く持つようになり、発達課題への取り組みを重要に感じる事が自我同一性感覚をより大きく揺り動かすものとなっている。3年生では、DTS の下位尺度および DTS 全体と EIS の「独自性 (UN)」尺度の間に負の有意な相関がみられ、自己の独自性、つまり自分のユニークさを自覚し、自分の意志を他者の前でも表現できるという感覚を感じる傾向の低い人が発達課題をより重要だと考えている。このことは女子大学生の自我同一性の有り様を検討するのに興味深い。自らの独自性を感じられる人にとっては青年期

女子大学生の発達課題への対処意識と自我同一性感覚との関連について

表一 4 a DTS と EIS の相関係数 (1年生)

	展望	女性性	自立	学園	DTS	SC	GD	SP	UN	EIS
将来展望										
女性性	.63***									
自立	.48***	.41**								
学園生活	.54***	.51***	.17							
DTS	.88***	.84***	.64***	.67***						
SC	-.13	-.13	-.13	.11	-.13					
GD	.14	.06	-.11	.24†	.13	.56***				
SP	.12	.25†	.14	.23†	.25†	.38**	.51***			
UN	-.08	-.09	-.08	-.09	-.08	.35**	.32*	.38***		
EIS	.01	.01	-.08	.17	.03	.83***	.83***	.70***	.61***	

† ; P < .10 \* ; P < .05 \*\* ; P < .01 \*\*\* ; P < .001

表一 4 a DTS と EIS の相関係数 (3年生)

	展望	女性性	自立	学園	DTS	SC	GD	SP	UN	EIS
将来展望										
女性性	.45***									
自立	.62***	.47***								
学園生活	.43***	.43***	.41**							
DTS	.82***	.74***	.80***	.73***						
SC	-.13	-.28*	-.24†	-.08	-.23†					
GD	.04	.00	-.11	.08	.01	.57***				
SP	.14	.21	.09	.24†	.24†	.30*	.56***			
UN	-.33**	-.43***	-.45***	-.33*	-.50***	.54***	.38**	.11		
EIS	.07	-.15	-.22†	-.00	-.14	.85***	.87***	.63***	.62***	

† ; P < .10 \* ; P < .05 \*\* ; P < .01 \*\*\* ; P < .001

の発達課題への取り組みはあまり自覚的にはなり得ないのに対して、独自性を感じられない人にとっては発達課題への対処は自覚的に意識されるともいえる。また、EISの「自己の一貫性(SC)」尺度がDTSの「女性性受容」下位尺度と有意な負の関連を、「親からの自立」下位尺度及びDTS全体と負の有意傾向の関連性を持つようになり、自分自身の一貫した感じを持たない人ほど、女性性の受容や親からの自立が重要な課題であると感じ、それだけ発達課題への取り組みが自覚的に意識されることが示されたと言えよう。さらに、EIS全体とDTSの「親からの自立」下位尺度の相関も負の有意傾向を示し、自我同一性感覚が低い者ほど、親からの自立を重要や課題であると感じている。

## 全体的討論

### 1) 女子大学生の発達課題への対処意識について——専門家からみた課題と実際の女子大学生の対処意識——

青年期の発達課題への取り組みの自覚を測定するための青年期発達課題尺度 (DTS) を作成し、調査 I で大学生の心理臨床専門職を対象にした調査を実施し、学年間での変動の様式から 3 つの次元 (大学への適応, 社会への出立, 青年期一般) の課題を明確にした。また調査 II で女子大学生を対象にした調査を実施し、その因子分析の結果から 4 因子 (将来展望因子, 女性性受容因子, 親からの自立因子, 学園生活因子) を抽出した。調査 I, 調査 II の次元間の関連について検討すると、調査 I の大学への適応の次元は調査 II の学園生活因子に多くが含まれ、同様に調査 I の社会への出立の次元は調査 II の親からの自立因子と将来展望因子の双方に含まれ、さらに調査 I の青年期一般次元が調査 II の女性性受容因子と学園生活因子に含まれた。心理援助の専門家が学年間での変動があると考えた前 2 者の次元は実際の女子大生を対象とした調査でも学年間で有意差が見られる項目が多く、また青年期一般の次元に含まれる項目の多くには学年差が見られなかった。女子大生の発達課題への自覚については、概ね心理臨床専門職の考えと実際の女子大生の結果とが一致すると言える。しかしながら、親からの自立については専門家が学年での変動はないと考えているのに対して、調査 II では学年差がみられ、親からの自立は社会への出立がより切実になる 3 年生になって自覚されるようになってくることが明らかになった。

Newman ら (1984) は青年期前期課題として身体的成熟 (第 2 次性徴), 形式的操作 (認知能力の発達), 情動の発達, 仲間集団における成員性 (仲間のなかの一員として活動できること), 異性関係を, 青年期後期の発達課題として両親からの自立, 性役割同一性 (男性/女性として社会的に期待される性役割を自分の同一性のなかにスムーズに統合できること), 道徳性の内在化, 職業選択をあげている。本研究での調査 II での取り組みへの自覚の第 4 の次元である学園生活での適応に関連する部分は青年期前期の発達課題の大部分に合致し、第 1 の次元の将来展望と第 3 の次元の親からの自立はともに青年期後期の発達課題に合致している。第 2 の次元の女性性受容は青年期前期の異性関係と青年期後期の性役割同一性の双方に関連している。従って、より低い発達段階からの発達課題である学園生活での適応については、1 年生と 3 年生とで有意な差はなく、発達段階のより高い課題である、親からの自立や将来展望については 1 年生より 3 年生の方が有意に自分にとって重要なものとして感じていると考えられる。こうした点は先に調査 I において考察した青年期前期の発達課題と青年期後期の発達課題との関連性を実証した形になる。

今後は発達課題への対処意識が、実際の対処行動とどのように結びついているのかを明らかにしていく必要がある。また今回取り上げた課題内容は一応納得できる発達の差異を見い

だすことが出来たものの、本当に Havighurst が言うような発達課題という内容に合致しているのかをさらに検討する必要がある。さらに、今回は女子大学生のみを調査対象としたが、男子大学生との比較から、発達課題への取り組みにおける性差の問題についても検討を加える必要がある。

## 2) 自我同一性感覚と発達課題への対処意識の関連様式の発達の変容について

調査IIの結果を見るかぎり、自我同一性感覚の変化については有意な差はなく、自我同一性感覚としては1年生と3年生では差がないことが示された。しかしながら、EISとDTSとの関連には1年生と3年生で違いがあり、大学生活のなかで自我同一性感覚と発達課題への取り組みの自覚との関連様式が発達的に変容することが明らかになった。学年にかかわらず、EISの自己肯定感下位尺度については、とりわけ学園生活での対人関係や学業以外の課題への取り組みを示すDTSの学園生活下位尺度と有意傾向の関連がある。友人関係やサークルなどの課外活動について「重要」と感じられるほど充実していただける者は高い自己評価や自己受容を示すとも言える。

次に学年間での違いについて検討していくと、1年生で自我同一性感覚と関連するほど重要な発達課題は先に述べた青年期一般次元の内容（女性性の受容と学園生活への適応）である。学園生活への適応については自我同一性感覚のなかの目標志向性の側面や自己肯定感の側面との関連性をもった。また、女性性受容は自我同一性感覚の自己肯定感の側面とは関連性を有した。女性性受容下位尺度、学園生活下位尺度ともに学年差はなく、1年生においても女性としての自分の確立や現状の学園生活を意識的に自分の課題と捉えて対処していこうとしている者ほど、自我同一性感覚のなかでも目的意識あるいは自分に対する肯定的感覚を強く感じていることが明らかとなった。3年生になると発達課題への対処意識全体と自我同一性感覚の独自性の側面との間に有意な関連が見られた。辻井（1989b）では独自性尺度については1年生が調査対象ながら、男子が女子よりも有意に高い得点をあげており、独自性尺度の得点が高いことはより男性的な対人関係様式をとっていることが考えられ、そうした傾向が強いほど発達課題を重要とは考えないことが明らかになった。社会的な自立を目前にした3年生では男性と同様の対人関係の持ち方でやっていく志向性の強い女子の方が葛藤なく、発達課題の重要性を自覚することも少なくやっていけるのに対して、他者の前では自分の意見を持ったり、主張したりしているという感覚の低い者は発達課題を自分に対する重要なものと自覚する傾向が強くなっている。また、自我同一性のなかでの自分の一貫性の側面と女性性受容に関わる発達課題への対処が負の関連を持ち、女性性受容を自覚的に重要に感じる傾向の強いものほど、自分自身の安定性や一貫性を低く感じており、発達課題への対処が自我同一性感覚を揺るがすものとなっており、3年生は1年生に比べて、より危機的な時期であることが示されたとも言える。これは小川（1989）の指摘とも重なっている。近年の

自我同一性研究より、女性の自我同一性形成は男性とはやや異なった傾向を示すことが明らかになってきている。例えば、高橋(1988)では同一性ステイタスにおける性差を検討して、女性にとって性役割は葛藤領域であること、男子よりも女子の方が親密性の形成が進展しており、同一性ステイタスと親密性ステイタスとが有意な関連を持たないこと等を示している。今回の結果においても、3年生で自我同一性感覚の独自性の側面と発達課題への対処意識とが有意な負の相関関係をもったのは、伝統的な性役割に従うならばより自分を主張しないことが良いとされるため葛藤を感じる内容について、現代的な女性の在り方としてキャリアをもって活動していくという、男性と同じ経路(male pathway; Hodgson and Fisher, 1979)を指向する女性にとっては、学園生活の充実、将来設計、親からの自立といった発達課題はその対処を自覚するほどのものではないことを示しているとも言える。

今後は、男子学生との比較から、女子学生の自我同一性形成や発達課題への取り組み、あるいは対処意識についてさらに検討を加える必要がある。また、今回は調査対象が4年生大学の文学部の学生であり、より職業との関連が深い看護系、教育系等の諸学部の学生を対象とした場合には異なった結果が生じてくる可能性も否定できない。今後はそうした他の学部・専攻学生との比較を行なっていく必要もある。

付記：本研究を行うにあたって、ご協力をお願いし、また、同時に有益なご助言をいただいた学生相談の専門家の諸先生に心より感謝の意を表します。さらに、調査にご協力いただいた東海女子大学の長谷川博一先生に感謝致します。

## 文 献

- Dignan, M. h. 1965 Ego identity and maternal identification. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 476-483.
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and Life Cycle: Psychological Issued*. 1. International University Press. (小此木啓吾編訳) 1973 自我同一性——アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房.)
- Erikson, E. H. 1968 *Identity: Youth and Crisis*. W. W. Norton. (岩瀬庸理(訳) 1969 主体性——青年と危機. 北望社)
- Josselson, R. L. 1973 Psychodynamic aspect of identity formation in college women. *Journal of youth and Adolescence*, 2, 3-52.
- Havighurst, R. J. 1953 *Human development and education*. Green & Co. (荘司雅子(訳) 1958 人間の発達と教育, 牧書店)
- Hodgson, J. W. & Fisher, J. L. 1979 Sex differences in identity and intimacy development in college youth. *Journal of Yoth and Adolescence*, 8. 37-50.
- Marcia, J. 1966 Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- Margolis, G. 1981 Moving away: Perspectives on counseling anxious freshman. *Adolescence*, 16, 633-640.

女子大学生の発達課題への対処意識と自我同一性感覚との関連について

- 松田君彦・広瀬春次 1982 青年期における自己像と自我同一性. 教育心理学研究, 30, 157-161.
- 三川俊樹 1988 青年期における生活ストレスと対処行動に関する研究. カウンセリング研究, 21, 1-13.
- 無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性. 教育心理学研究, 27, 178-187.
- Newman, B. M., & Newman, P. R. 1984 Development through life - a psychosocial approach -. Dorsey. (福富 護・伊藤恭子(訳) 1987 生涯発達心理学 川島書店)
- 小川俊樹 1989 学生相談から見た女子学生の不適応—その第2の関門について—. 日本カウンセリング学会第22回大会論文集, 78-79.
- Schenkel, S., & Marcia, J. E. 1972 Attitude toward premarital intercourse in determining ego identity status in college women. Journal of Personality, 3, 472-482.
- Stark, P. A., & Traxler, A. J. 1974 Empirical validation of Erikson's theory of identity crisis in late adolescence. Journal of Psychology, 86, 25-33.
- 高橋裕行 1988 同一性と親密性の危機の解決における性差——自我同一性地位の Rasmussen の EIS による併存的妥当性の検討——教育心理学研究, 36, 210-219.
- 高橋藏人 1989 青年期における分離固体化に関する研究——質問紙による考察——心理臨床学研究, 7, 4-14.
- 辻井正次 1989 a 発達課題への対処からみた大学生の自我同一性の様態——面接法によるアプローチ——. 日本カウンセリング学会第22回大会論文集, 88-89.
- 辻井正次 1989 b 発達課題への対処に伴う大学生の自我同一性の感覚——自我同一性尺度作成の試み——. 日本教育心理学会第31回総会大会論文集, 173.
- 鶴田和美 1989 大学生の個別相談事例の特徴と面接過程——学生相談の全体像を記述する試み——名古屋大学学生相談室紀要, 1, 3-12.
- 鶴田和美 1991 大学生の個別相談事例から見た入学期の意味——学生自身が行う「もう一つのオリエンテーション」とその援助——名古屋大学学生相談室紀要, 3, 3-14.
- 山本里花 1988 女子学生の自我同一性に関する研究——自我の二指向性の観点から——教育心理学研究, 36, 238-248.
- Waterman, C. K., & Nevid, J. S. 1977 Sex differences in the resolution of identity crisis. Developmental Psychology, 21, 149-160.
- Yeaworth, R. C., York, J., Hussey, M.A., et al. 1980 The development of an adolescent life change event scale. Adolescence, 15, 91-97.